

# こくりこ日記

高田昭子のb2evolution blogです

## アーカイブ: 2007年2月

**2007/02/28**

□ 15:44:57, カテゴリ: [日記](#), views: 800 | [•](#)

「マグヌス」の序奏より。



「マグヌス」はシルヴィー・ジエルマンの小説。感想は「ふくろう日記」の方に書きました。読了後に改めて冒頭の「序奏」を読みかえしましたが、ここには「書く」ということについて、とても大切なことが書かれていました。覚書としてメモしておこう。

『一冊の本に使われる言葉は、ひとりの人生の日々以上にひとまとまりになっているわけではなく、言葉や日々はどんなに豊かでも、ただ沈黙という広大な画面に、文章や示唆や部分的可能性の小島を描いているだけだ。しかも沈黙は完璧でも平穀でもなく、小さなささやきを絶え間なく発している。過去の彼方から聞こえてくるささやきは、至るところからどっと噴き出す現在の声と重なる。』

『書くということは、ささやきの奥底まで降りてゆき、その声が途絶える時点で、言葉の間隔、言葉の周辺、ときには言葉の中核から聞こえてくる息づかいに耳を傾ける術を知ることなのだ。』

春の部屋星空つくる工夫いて 昭子

[4コメント](#) • [編集](#)



## こくりこ日記

高田昭子のb2evolution blog  
[吸殻山383番地の家に戻る。](#)  
[中央1番地に戻る。](#)

- [最新 \(キャッシュ\)](#)
- [最新 \(キャッシュされない\)](#)

**2007年2月**

日	月	火	水	木
				1
4	5	6	7	8
11	12	13	14	15
18	19	20	21	22
25	26	27	28	

[<<](#) [<](#)

- [最近のコメント](#)

## Heavy Hitters

- [Test \(20 visits\)](#)
- [Walking1日目。 \(20 visits\)](#)
- [詩の歳時記-123 「桜](#)
- [詩の歳時記-56 \(20 visits\)](#)
- [引用文-23・あきらめ](#)
- [詩の歳時記-117 \(19 visits\)](#)
- [詩の歳時記-82 \(19 visits\)](#)
- [花守 \(19 visits\)](#)
- [かぼちゃな一日 \(19 visits\)](#)
- [詩の歳時記-305 「夕](#)
- visits)
- [詩の歳時記-274 「あ](#)
- visits)
- [詩の歳時記-253 「桃](#)
- visits)

## 検索



全ての語



いずれかの語

## 2007/02/24

13:28:41, カテゴリ: [日記](#), views: 828 ●

子供は生きている。



女性が仕事を持ち、自立できる時代が来たことは、おおいに喜ぶべきことです。しかしこでいつも問われるのは「母」と「子供」の問題なのでしょう。「母」が自立するために「子供」の存在は大問題となってしまった。まず今の出産適齢期にいる女性たちは「子供を産むか否か?」を考えるようになり、その後で「出産と育児の困難さ」に直面し、そして「仕事との両立は可能か否か?」という構図で考えるようになってしまったようです。

しかし本来「子供」が産まれ、育ってゆくことは原初から引き継がれたものであり、特別なできことではない。無意識下にあった自然ないのちの営みを、女性の生き方の「大テーマ」として考えなければならない時代になってしまったということではないだろうか?元より「子供の生誕」と「女性の現代の生き方」とを並列して考えることには無理があるのではないか?母と子供とのいのちの連鎖は自然に取り結ばれるものではないでしょうか。そこは「フェミニズム」も「ジェンダー」も介在できない「アジール」的な世界なのではないかと思われます。

＊＊＊

これは「ふくろう日記」に二〇〇五年七月に書いた「オニババ化する女たち 三砂ちづる著」の感想文からの抜粋です。ちょっと心にひつかかることがあったのでここに部分再録しておきます。

いつの日か子供が辿る春の道

昭子

[4コメント](#) • [編集](#)



## 2007/02/19

02:12:16, カテゴリ: [日記](#), views: 988 ●

[東京マラソン・2007](#)

フレーズ

[検索](#)

カテゴリ

■ All

- [百人百詩](#) (100)
- [詩の歳時記](#) (365)
- [詩日記](#) (20)
- [My Haiku](#) (49)
- [Walking](#) (13)
- [引用文](#) (31)
- [日記](#) (163)

[選択](#)

アーカイブ

- [2015年11月](#) (1)
- [2015年7月](#) (1)
- [2015年5月](#) (2)
- [2015年3月](#) (3)
- [2015年2月](#) (2)
- [2015年1月](#) (3)
- [2014年12月](#) (2)
- [2014年11月](#) (2)
- [2014年10月](#) (3)
- [2014年9月](#) (2)
- [2014年8月](#) (2)
- [2014年7月](#) (2)
- [続き...](#)

いろいろ

■ [管理](#)

- [プロフィール](#) (admin)
- [ログアウト](#) (admin)

このブログの配信 [XM](#)

■ RSS 0.92: [投稿](#), [コメント](#)

■ RSS 1.0: [投稿](#), [コメント](#)

■ RSS 2.0: [投稿](#), [コメント](#)



■ Atom: [投稿](#), [コメント](#)

[What is RSS?](#)

powered by  
**b2evolution**



18日（日）の雨のなか、愛娘は5回目のフルマラソンに参加。タイムは3時間53分26秒、今回やっと4時間の壁を破った。自己ベスト更新めでたい。初めて雨のなかを走るので、風邪をひかないか、タイムが思うようにいかないのではないかと、心配ばかりしていましたが、結果はよかったです。

ずっと雨が降っており、娘はゴールまで雨合羽を着て走ったようですが、雨による湿気は呼吸を楽にする。熱い太陽光線にあたりながら走るよりも疲労も少ないので聞いて、「ふうむ。そういうものか。」と安心しました。

[6コメント](#) • [編集](#)



**2007/02/11**

22:16:49, カテゴリ: [日記](#), views: 780 

## 千の風になって



(絵=フランク・ハウエル)

Do not stand at my grave and weep

Do not stand at my grave and weep  
 I am not there, I do not sleep  
 I am in a thousand winds that blow  
 I am the softly falling snow  
 I am the gentle showers of rain  
 I am the fields of ripening grain  
 I am in the morning hush  
 I am in the graceful rush  
 Of beautiful birds in circling flight  
 I am the starshine of the night  
 I am in the flowers that bloom  
 I am in a quiet room  
 I am in the birds that sing  
 I am in the each lovely thing  
 Do not stand at my grave and cry  
 I am not there I do not die

この詩の邦訳はさまざまにあります。とりあえず「新井満訳」を記しておきます。この詩につけられた曲もアメリカ、イギリス、日本などでさまざまにあります。これを歌っている歌い手も。。。。

私のお墓の前で 泣かないでください  
 そこに私はいません 眠ってなんかいません  
 千の風に  
 千の風になって  
 あの大きな空を  
 吹きわたっています

秋には光になって 煙にふりそそぐ  
 冬はダイヤのように きらめく雪になる  
 朝は鳥になって あなたを目覚めさせる  
 夜は星になって あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないでください  
 そこに私はいません 死んでなんかいません  
 千の風に

千の風になって  
あの大きな空を  
吹きわたっています

千の風に  
千の風になって  
あの大きな空を  
吹きわたっています

あの大きな空を  
吹きわたっています

この詩の原作者はメアリー・フライ（主婦、詩人。一九〇五年十一月十三日生。二〇〇四年九月十五日没 享年九十九）とされているらしいのですが、詳細はわかりません。イギリスの二十一歳の兵士スティーブン・クインズが、家族に宛てた手紙のなかに書かれていたという説もあります。

この詩は「9・11事件」の追悼会において、父親を亡くした少女によって読まれたり、さまざまな場面で朗読されているようです。こうして静かなブームを起しているこの詩をどうにも無視できなくなつたのは、わたくしが詩作のなかでいつでも考えている疑問に漣をたてているからです。わたくしはこのように人々の心にふと思いつく、口ずさまれる詩を書いたことがあるのだろうか？ということです。詩の原点というものはこうしたところにあるのではないか？とつねに思っているからかもしれません。

この詩の源泉には、ネイティヴ・アメリカンやケルトにみられる「死生感」を感じます。「死」と「生」とは区切られない。死者の魂は生者の世界にいつも在るという原始的な宗教観が隠されているように思います。生きる者を見守るのは「神」ではない、やさしい「祖先」だという考え方です。ネイティヴ・アメリカンのある部族では、死者の骨を粉にして、親族一同がそれを飲むという儀式があります。それは死者を生者の体内に宿す、それによって死者が生者を守るという考え方からです。

父の樹に母の花咲く夕まぐれ 昭子

#### 【追記】

ここで、「千の風になって」の歌が聴けます。お知らせ下さった方に御礼申し上げます。

<http://www.youtube.com/watch?v=lRnBtvjuYRg>

[2コメント](#) • [編集](#)



## 2007/02/08

17:34:51, カテゴリ: [日記](#), views: 798

夢をみた。



十九歳だった詩人T・Mちゃんに会ったのは二十年前、わたくしは彼女の母上と同じ年だった。その彼女が三冊目の詩集で、大きな賞を受賞することになった。めでたい。昨日は授賞式の案内状も届いた。夕べはおかげで久しぶりによい夢をみた。

彼女もわたしも、同じ師のもとで詩の出発をしているのだが、（わたくしの場合は「再出発」かな？）その師が夢の中に現われて、なにかを丹念に書いていたのだ。「せんせい。なにをお書きになっているのですか？」とたずねると、「ある作家の文章を毎日二ページづつ書き写しているのよ。」とお答えになった。「これはとてもよいことなの。」と微笑むのでした。目が覚めても夢ではないような気がしている。。。

さくらさくら小さき人の笑みのごと 昭子

[2コメント](#) • [編集](#)



## 2007/02/06

16:45:06, カテゴリ: [日記](#), views: 1490

わたしを束ねないで



わたしを束ねないで 新川和江

わたしを束ねないで  
あらせいという花のように  
白い葱のように  
束ねないでください わたしは稻妻  
秋 大地が胸を焦がす  
見渡すかぎりの金色の稻妻

わたしを止めないで  
標本箱の昆虫のように  
高原からきた絵葉書のように  
止めないでください わたしは羽撃き  
こやみなく空のひろさをかいさぐっている  
目には見えないつばさの音

わたしを注がないで  
日常性に薄められた牛乳のように  
ぬるい酒のように  
注がないでください わたしは海  
夜 とほうもなく満ちている  
苦い潮 ふちのない水

わたしを名づけないで  
娘という名 妻という名  
重々しい母という名でしつらえた座に  
座りきりにさせないでください わたしは風  
りんごの木と  
泉のありかを知っている風

わたしを区切らないで  
, (コンマ) や・(ピリオド) いくつかの段落  
そしておしまいに「さよなら」があつたりする手紙のようには  
こまめにけりをつけないでください わたしは終わりのない文章

川と同じに  
はてしなく流れていく 広がっていく 一行の詩

(詩集「比喩ではなく」・一九六八年・地球社刊) より。

ちょっと長いですが全文引用しました。先日行われた女性詩人六人の方の朗読とトークの会は、六人の方によるこの詩「わたしを束ねないで」の群読から始まりました。この六人の女性詩人のほかには、映像のみで白石かずこ、平田俊子が参加していました。この新川和江とほぼ同世代の詩人は白石かずこですね。

この詩が最初に群読として使われたことには、どうやらあまり深い意味はなかったようです。何故この詩が選ばれたのでしょうか?この理由は聞きそぞりましたが。。どなたか若い(…と言っても年齢はわかりませんが。)詩人がトークのなかで「もう。束ねないで、と言う必要はなくなった。」と発言されていたようでした。

一九八三年から十年間、新川和江と吉原幸子がともに主宰された季刊詩誌「ラ・メール」の存在とその大切な十年の時間もすでに遠い時間になつたのでしょうか。この「ラ・メール」は男性詩人主体の「現代詩手帖」によい意味で拮抗するものとして、女性詩人の活躍の場として発刊されたものでした。その役割は大きかったと思います。

現在言われている「フェミニズム」の源流が「元始、女性は太陽であった。」という平塚らいてうの言葉であったと思う時に、いつでもわたくしは自分の足元を雪がずにはいられない。

・編集



## 2007/02/05

17:23:10, カテゴリ: [日記](#), views: 689

「書く歓び」とは、なんですか?



空しい結果であろうと予測される場面に、あえて出てゆくこともある。

人間とはそんなものだ。そんな時にこの詩がわたしの中で語りだす。

書く歓び ヴィスワヴァ・シンボルスカ (四元康祐訳)

書かれた鹿はなぜ書かれた森を飛び跳ねてゆくのか  
その柔らかな鼻先を複写する泉の表面から  
書かれた水を飲むためだろうか  
なぜ頭をもたげるのだろう なにか聞こえるのか  
真実から借りたしなやかな四肢に支えられて  
鹿は耳をそばだてる——私の指の下で  
しづけさ その一語すらが頁を震わせる  
「森」という言葉から生えた  
枝をかき分けて

白い頁に飛びかかると、待ち伏せるのは  
ゴロツキの文字どもだ  
その文節の爪先のなんと従属なこと  
鹿はもう逃げられまい

インクの一滴毎に大勢の狩人たち  
細めた目で遠くを見つめ  
いつでも傾いたペン先に群がる準備を整え  
鹿を取り巻き ゆっくりと銃口を向ける

今起こっていることが本当だと思い込んでいるのだ  
白地に黒の、別の法則がここを支配している  
私が命する限り瞳はきらめき続けるだろう  
それを永遠のかけらに碎くことも私の気持次第だ  
静止した弾丸を空中に散りばめて  
私が口を開かない限りなにひとつ起こらない  
葉っぱ一枚が落ちるのにも たたずむ鹿の小さな蹄の下で  
草の葉一枚が折れ曲がるのにも私の祝福がいる

私が総ての運命を支配する世界が  
存在するということなのか  
私が記号で束ねる時間が  
私に意のままに存在は不朽と化すのか  
書く歓び  
とじこめてしまう力  
いつか死ぬ一本の手の復讐

• [編集](#)



## 2007/02/02

00:18:08, カテゴリ: [日記](#), views: 532

満月

枯れ枝の向こうに見える満月。  
ううむ。カメラの腕前はなかなか上達しないのである。



夕暮には、この枝にキジバトがいました。



冬の午後ででっぽうぽうおとずれよ 昭子

・編集



Original template design by [Fran ois PLANQUE](#).

